

「平成文学」とは何か、という問い

——「あとがき」にかえて——

金 井 景 子

昨年の暮れ、探し物の延長で、結果的に机周りの大整理をすることになったのだが、懐かしい顔ぶれの抜刷りが出てきた。「シンポジウム昭和文学とはなにか——評言と構想——」（宮城学院女子大学基督教文化研究所 研究年報、第二号、一九八九・三）と題するもので、基調報告を小笠原克さんと栗坪良樹さん、司会を今村忠純さんがなさっている。

天皇の容体が重篤になり、昭和の終わりが予感される中、小笠原さんや栗坪さんは、どんな作品や作家で、昭和文学を語ろうとしていたのかと言えは、それは中野重治の詩「雨の降る田川駅」や小説『五勺の酒』であり、バチユラー八重子の歌集『若きウタリに』、川端康成の『雪国』、井伏鱒二の『遥洋隊長』などであった。小笠原さんは北海道に軸足を据えて、長年、文芸誌「北方文芸」の編集長を勤め、また小樽運河を遺す住民運動のリーダーとして活躍された方で、栗坪さんは「すばる」を拠点に文芸誌で闊達な評論活動を展開しておられ、何より瞠目すべきは年間「三本以上の映画を劇場で観る」ということを常々と重ねておられたことである。このシンポジウムでもヴェンダースの『ベルリン天使の歌』が昭和天皇と『雪国』の島村を串刺しにする役目を果たしている。どちらも談論風発、語り出せば「国文学者」の入れ物には収まりきらないスケールで、読みながらお二人の声が聞こえてくるような愉しさがあった。

とはいえ読み終わると、このシンポジウムで提起されている「昭和文学とはなにか」という問いに、その後、より先鋭なジェンダーやポ

ストコロニアルの理論の洗礼を受け、ナシヨナリズム批判の論議を経たに関わらず、どれほど手心えのある自答を用意し得たかということもとない限りであり、終焉に向けてカウントダウンが始まった「平成文学」についてはなお一層、茫漠としている。元号によって分節化される文学に意味などない、と言えなくもないが、暮れに書物の波間から浮上した抜刷りに、お前さんなりに考えてみると言われた心地がして、その問いを、この論集を書いたり読んだりして下さる面々にもお示しした次第である。

昨年と言えば、三月の下旬、ご縁があつて北海道の白老にお住いの、大須賀る冬さんをお訪ねし、お話を伺つたことも書いておきたい。アイヌ文化を伝承するメンバーさんたちが拵えて下さつたオハウ（スーブ）やエント茶（ハーブティー）を戴きながら、大須賀さんのおばあちゃんの逸話を聴いた。

幼い頃、おばあちゃんと歩いてきた大須賀さんは、曇りの良い魚屋さんの店頭脇に、鮭の頭が捨ててあるのを見つけた。おばあちゃんは魚屋さんに、「これ、捨てるのかい？」と尋ねて、そうだと確認すると、その頭を三つ貰い受けて荒縄を通し、雪の積もる白老の街を引きずつて帰つたという。幼いながら、その脇を歩くのが、格好悪くて恥ずかしかつたのだそである。

五十歳を過ぎてから、アイヌ語とアイヌ文化を学び直して、大須賀さんは、鮭で一番美味しくて栄養があるのは頭だと分かつたし、全てを無駄にしないアイヌの習わしに照らせば、おばあちゃんのことの意味が良く分かつたと話して下さつた。

そして、「学び続けること」で、私は「誇りと安心を得ました」と笑顔を見せて下さつた。その証は、以後一七年の間に、かつてアイヌの人々が食料や薬用に用いていた植物を、彼女の庭に二二〇種類以上も栽培することになったことに結実している。

白老には二〇二〇年——東京オリピックの年でもある——に、国立アイヌ博物館がオープンする。歴史的には様々な軋轢や桎梏が伏在する、在来アイヌの人々と移住して来た人々との間に、橋を架けるべく、私の地元学の師匠である吉本哲郎さんが招かれてプロジェクトを展開している。小さなお手伝いをさせていただいたのも、その一環なのだが、大須賀さんたちアイヌの語り部さんの声は、どんな風に活かされるのか、固唾を飲んで見届けたい。そこにもまた、昭和の記憶を、平成に学びを通して再発見・再構築し、物語化して行く営みが凝縮されてあるからだ。改めて言つてもなく、「文学」は本の中にも外にも在る。

末筆になったが、この「研究と資料」の第一期発刊を、提案下さった千葉俊一先生が、本年度をもって定年を迎えられた。本誌刊行に関して長年にわたり、千葉先生の「指導・」鞭撻を頂戴できたことに、心から感謝申し上げます。